日本の文化財建造物における保存古材の取り扱いの変遷

STUDY ON DEVELOPMENT OF JAPANESE HISTORY FOR
PRESERVATION OF REMOVED PARTS FROM ARCHITECTURAL CULTURAL PROPERTIES清 永 洋 平^{*1}

Yohei KIYONAGA

The author wishes to explore the development of Japanese history for preservation of removed parts from architectural cultural properties while focusing on the selection criteria for its preservation. Initially by tracing the development of the selection criteria with the guidelines for the conservation projects. Secondly by making the list of removed parts designated as cultural properties, and analyzing it separated into 6 types. Thirdly by finding the first removed parts or the first report of ones for the conservation projects.

Keywords : architectural cultural properties, preservation for removed parts, selection criteria

文化財建造物, 保存古材, 選別の方針

1. 緒言

日本の文化財建造物の保存修理では、用いられてきた部材を最大限に尊重している。部材に経年による劣化や腐朽及び破損があれば、その箇所を繕い、強度が不足する場合には補強を施すなど、構造上支障のない範囲で部材を再用している。

しかし、その対応が困難な場合や、過去の姿に復原する方針により、不再用となった場合、取り外された部材の中から一部を選んで、建造物の小屋組内やその近辺に、古材として保管(以下、保存古材と記す。)を図っている。

オリジナルの材質や当時の技法を内包する保存古材は、図面作製、写真撮影及びそれらを纏めた修理工事報告書(以下、工事報告書と記す。)と同様に、保存修理の内容を記録する有効な方法の一つとして国内外に広く認識されている^{注1)}。また、近年では保存古材を用いた科学的な調査研究も進展し、その重要性も高まりつつある^{注2)}。

しかし、これまでの保存修理史の既往研究では、保存古材に焦点を当てた考察は見当たらず、保存古材の取り扱いの変遷についてはあまり注目されてこなかった^{注3)}。また、各地で保管され、膨大な数に上るとみられる保存古材に対して、個別分散的な調査はあるものの、網羅的な把握はなく、その全体像も判然としていない^{注4)}。

そこで、本稿は、保存古材の取り扱いの変遷を、行政資料に現れる文化財建造物の保存古材を選別する際の方針(以下、方針と記す。)に着目して明らかにした上で、網羅的に把握可能な国宝・重要文化財建造物の附に指定された建築部材(以下、附指定古材と記す。)に基づき、その実態を把握することを目的とする。

本稿の構成はまず、古社寺保存法(明治30年(1897)～)、国宝保存法(昭和4年(1929)～)、文化財保護法(昭和25年～)の各時代における行政資料の中から、方針の有無とその変遷を明らかにする。次に

附指定古材の類型化を通じてその時代的特徴を明らかにし、先に導いた方針と諸類型を照合し、その実態を把握する。さらに行政資料に方針がない時期の保存古材の取り扱いを、最初期の解体修理における保存古材の実例や工事報告書を通じて検討する。以上をもとに、文化財建造物における保存古材の取り扱いの変遷を明らかにする。

2. 行政資料からみた保存古材の取り扱いの変遷

2.1 現在の保存古材の取り扱い

最初に現在の保存古材の取り扱いを確認しておく。文化庁『国宝重要文化財(建造物)保存修理事業実務の手引き』(平成30年(2018)6月)に拠れば^{注5)}、文化財建造物の保存修理事業は、保存修理の経験を有し、かつ文化庁が承認する主任技術者の設計監理のもと、破損状況に応じて修理が進められている。

各々の修理の工程で、部材の性能を調査するが、劣化・腐朽・破損した部材を取り替える場合、不再用材が発生する。また、大規模修理では解体調査を踏まえ現状維持、復原、あるいは管理行為や活用内容を含めた修理方針が決定される。その結果として意匠や構造の復旧、管理、活用のため、やむを得ず不再用材が発生する。

不再用材はそこから「現状変更の資料としたもの及び将来重要な参考資料となり得るもの」^{注6)}を保存古材として選別し、それら以外は通常は廃棄される。全部材の所有権はその建造物の所有者にあるが、不再用材の保存又は廃棄の別の判断は主任技術者の調査、文化庁等の行政の指導下、所有者の意向、事業規模、事業期間、保管場所の規模等、総合的に検討されて、保存される部材の選択と管理が決定されている。

保存古材のうち、建造物と一体となって価値を形成する建築部材は、建造物本体の附として指定され、保護の措置が図られている^{注7)}。

^{*1} 文化庁 文化財調査官・修士(芸術工学)

Senior Specialist for Cultural Property, Agency for Cultural Affairs, M.Des.

2.2 方針を示す行政資料

文化財建造物の保存修理における国の考え方を示す行政資料のうち、保存古材の選別の方針を示すものは、古社寺保存法時代にはない。国宝保存法時代では、(1)文部省「国宝建造物維持修理要項」(昭和15年3月7日文部次官決定)^{注9)}があり、文化財保護法時代には、(2)文化財保護委員会「国宝及重要文化財建造物解体修理心得」(昭和31年10月)^{注9)}、(3)文化庁文化財保護部建造物課『重要文化財建造物保存修理技術者実務必携 1(修理設計の心得と工事事務の心得)』(昭和49年8月)、(4)文化庁文化財部建造物課『文化財建造物保存修理補助事業実務の手引き』(平成15年8月初版、平成30年6月最終改訂)の3つがあり、計4つの資料を見出せる。

2.3 各資料における方針とその変遷

(1)では、「維持修理ニ際シ使用不能トナリタル古材ニシテ學術上又ハ由緒上保存スベキ價值アリト認メラルルモノハ適當ナル方法ニ依リ之ヲ保存スルコト」とあるから^{注10)}、方針は「學術上又は由緒上の価値があると認められるもの」(方針①)であったとわかる。

(2)では、直接的な記載はないが、解体調査の仕様調書作製上について、「各部につき解体のつど従来の仕様を記録し、併せてその年代判定を附記する。記録は出来る限り仕事別に区分する。(中略)なお、写真、図面、現物保存等によりこれを補足する。」とある^{注11)}。このため、方針①が継続しつつ、この頃には「仕様の記録として現物保存」(方針②)も含んでいたと考えられる。

(3)では、「取り替え等による不用材のうち、現状変更の資料としたもの及びその他将来重要な参考資料となると思われるもの等は、防腐・防虫処理を施し、小物は保管箱にまとめるなどしてそれぞれ説明を付し、小屋裏など適当な場所に保存する。(後略)」とある^{注12)}。このため、方針は「現状変更の資料としたもの及びその他将来重要な参考資料となると思われるもの等」(方針③)になったとわかる。

ただ、方針③は「現状変更の資料としたもの」を基調としつつ、「その他将来重要な参考資料となると思われるもの」とし、より包括的な表現であるから、先の2方針を包含した考え方へ移行したと推定される。

(4)は先述した現在の方針で、方針③がその後もほぼ引き継がれているとわかる。このため、方針③は昭和49年に成立し、これが現在まで適用されていると判断できる。

以上、3方針の存在とその変遷を確認した。次に3方針と附指定古材を照合し、その実態を考察したい。

3 附指定の建築部材からみた方針の実態

3.1 附指定された建築部材

正福寺地藏堂は昭和9年に解体修理が竣工したが、その際に刊行した工事報告書で初めて保存古材の存在を確認できる^{注13)}。しかし、これ以降の工事報告書では記載内容に粗密がある。また、各地で保管され膨大な数に上るとみられる保存古材に対し、これまで網羅的調査はない。そこで、保存古材の全体像を把握するため、既に保護措置が図られた国宝・重要文化財建造物の附指定古材を用いる。

附指定古材は、先の3方針の下に選別され、さらに重要なものとして選別されているから、そこには保存古材の選別方針の実態が具体的に投影されていると考えられる。

附指定古材には建造物本体と同時指定、またはその後の追加指定

の2種があるが、解体修理等の工事で取り外された保存古材を取り扱うため、今回は後者を対象とする。そこで、官報に掲載された附指定古材のうち追加指定のものを抽出して作成したのが表1である。

行政資料で保存古材の記述が現れるのは、先述の通り昭和15年からで、表1に網羅した附指定古材は昭和19年以降ではあるが、その時期的相違は少ないため、この表が保存古材の選別の方針の時期的特徴を反映している可能性は高い。この表により、件数、内容及びその推移を把握でき、附指定古材に限られるが、これまで不鮮明であった保存古材の全体像の一端が明らかになった。

表1をみると、昭和19年から平成24年の間に67棟(国宝20棟、重要文化財47棟)の附指定古材を確認できる。初めての附指定はNo.1-1二荒山神社本殿の旧本殿棟木断片で、明治35年の災害復旧による屋根修理時に取り外されたものが指定され、「元和五年九月」の墨書は本殿の建立年代を示す^{注14)}。保存古材の附指定は、昭和27年から平成3年まで継続的に進められたが、それ以降の増加はあまり見られない。平成24年にはNo.1-67唐招提寺金堂の保存修理事業で取り外された旧鴟尾2点が金堂創建とその後の修理を物語る建築部材として附指定されるが^{注15)}、これ以降の附指定はない。

附指定古材は、建立や修理の年代を示す墨書等の年記があるものやこれら年記のない部材に区別できる。部材は1点から、複数で構成されるものがあり、点数が多いものは、No.1-30三仏寺奥院(投入堂)の古材43点やNo.1-32瑞花院本堂の古瓦43枚があり、No.1-11法隆寺金堂の旧初重軸部(組物を含む)1棟が最大規模になる。

3.2 年記と員数による附指定古材の類型化

附指定古材の時期的特徴を把握するため、まず附指定古材の性格と員数から類型化を図り、次に各類型に分類して年代毎の件数を確認する。最後に3方針と照合し、その実態を把握したい。

類型化には、附指定古材の指定理由を考慮しなければならないが、建造物とは別に独自の指定基準が設けられたことがない。また、保存古材の追加指定の際の個別の指定理由は幾つか知られるが、全てではないため、それらも参照できない^{注16)}。しかし、附指定古材は墨書等の年記の有無及びその性格から、以下の3類型に区分できる。

類型1 建立年代を示す歴史資料

類型2 修理年代を示す歴史資料

類型3 建立や修理の年代を示す墨書等がない建築資料

類型1は建立の年記を示す附指定古材で、墨書のある棟木や刻銘のある輪軸露盤などが該当する。類型2は建立以後の修理の年記が発見された附指定古材で、軸部や組物、簷書のある瓦などが該当する。類型3は墨書等の年記がない附指定古材で、建立当初の部材、彫刻などの技法を示すもの、建立以後の修理に伴う部材や現状変更により取り外された部材などが該当する。

また、各類型は上記の区分のみならず、附指定の員数構成から次の2類型に区分できる。

A型 単体古材型(員数が1点以下の附指定古材)

B型 古材群型(員数が2点以上で群を構成する附指定古材)

A型は、極めて重要な価値が認められた部材のみが厳選されて指定された可能性があり、これに対し、B型は群として構成される部材にも重要な価値が認められて指定された可能性がある。

以上、附指定古材の性格と員数構成により区分した各類型の件数を時期別に示し、3方針と照合した結果が図1である。

Table 1 Removed Parts by Attachment Designated as National Treasure or Important Cultural Properties (Additional Designation)

表1 国宝・重要文化財建造物の附指定古材(追加指定)

番号 (No.)	指定年月日 (Date of Designation as Cultural Property) 指定年度年月日 (Date of Designation as National Treasure)	附指定年月 (Date of Attached Designation)	所在地 (Prefecture)	種別 (Grade)	件名 (Name)	建築年代 (Building Year)	附指定名称 (Name of Attachment)	墨書等年記及び構成 (Notes)	類型 (Type)
1-1	M41(1908)/8/1	S19(1944)/9/5	栃木県	重文	二荒山神社	元和5(1619)	旧本殿棟木断片:1箇	「御建立征夷大將軍 源秀忠公 御大工造江國廣松住人鈴木近江守藤原朝臣長次」(元和五年己未九月 日)云々(刻銘アリ)	1 A
1-2	M34(1901)/3/27 S27(1952)/3/29	S27(1952)/3/29	奈良県	国宝	柴山寺八角堂	天平宝字(757-764)	旧石露堂残欠(宝珠):1箇	-	3 A
1-3	M33(1900)/4/7 S27(1952)/3/29	S27(1952)/3/29	島根県	国宝	神魂神社本殿	正統11(1583)	心御柱古材:1箇	正平元年丙戌十一月の記がある	1 A
1-4	M35(1902)/7/31 S27(1952)/11/22	S27(1952)/11/22	京都府	国宝	宇治上神社拝殿	鎌倉前期(1185-1274)	横唐戸:4枚、蓋段:1箇	-	3 B
1-5	M34(1901)/3/27 S28(1953)/3/31	S28(1953)/3/31	奈良県	国宝	法隆寺南大門	永享10(1438)	旧棟木:1本	上棟永享十年戊午十一月十九日の記がある	1 A
1-6	M34(1901)/3/27 S28(1953)/3/31	S28(1953)/3/31	滋賀県	国宝	常楽寺三重塔	応永7(1400)	丸瓦及び平瓦:各1箇	各応永七年五月の記がある	1 B
1-7	T12(1923)/3/28 S28(1953)/3/20	S29(1954)/3/20	兵庫県	国宝	朝光寺本堂	応永20〜正長元 (1418〜1428)	裏子殿旧板:2枚	本堂之本尊御移徙応永廿年癸巳八月十五日の記があるもの1、佛壇之建立応永廿年癸巳八月十五日及び上基正長元年土月口日の記があるもの1	1 B
1-8	M40(1907)/5/27 S27(1952)/11/22	S30(1955)/2/2	大分県	国宝	富貴寺大室	平安後期(1086-1184)	旧棟木の部分:1本	修造藤阿弥陀堂一宇文和の記がある	2 A
1-9	M34(1901)/3/27 S30(1955)/2/2	S30(1955)/2/2	奈良県	国宝	法隆寺西円堂	建長2(1250)	旧小屋組心束:1本	建長二年庚戌十二月八日の墨書がある	1 A
1-10	M30(1897)/12/28 S27(1952)/3/29	S33(1958)/2/8	京都府	国宝	大観音寺本堂(千本釈迦堂)	安貞元(1227)	旧棟木:1本	安貞元年歳次 丁亥十二月二六日の記がある	1 A
1-11	M30(1897)/12/28 S28(1953)/6/9	S34(1959)/6/27	奈良県	国宝	法隆寺金堂	飛鳥(593-709)	旧初重軸部(組物を含む):1構	-	3 B
1-12	M37(1904)/2/18 S36(1961)/4/7	S36(1961)/4/27	奈良県	国宝	薬師寺東院堂	弘安8(1285)	平瓦:1枚	弘安辛巳の陽刻銘がある	1 A
1-13	M37(1904)/2/18	S36(1961)/12/27	兵庫県	重文	御霊神社本殿	文明2(1470)	旧瓦殿:2枚	各文明武康貞慶五月廿八日せんくうの記がある	1 B
1-14	M37(1904)/2/18	S36(1961)/12/27	兵庫県	重文	高亮布神社本殿	永正10(1513)	旧頭瓦:1本	永正十年八月十九日より初墨書ある	1 A
1-15	M41(1908)/4/23	S36(1961)/12/27	青森県	重文	巖持院五重塔	寛文6(1666)	旧伏鉢:1箇分、旧露盤:1箇	旧伏鉢:建立寛文六年五月六日吉口の銘がある	1 B
1-16	M41(1908)/8/1	S37(1962)/6/21	栃木県	重文	西明寺樓門	明応3(1494)	旧巻斗:1箇	明応三つわん松元六年六月二日の墨書がある	1 A
1-17	T5(1916)/5/24	S37(1962)/6/21	栃木県	重文	地藏院本堂	天文11(1542)頃	旧壁板:1間分(6枚)	命禪三王三つ三日の墨書がある	1 B
1-18	S4(1929)/4/6	S42(1967)/6/21	香川県	重文	武田八幡神社本殿	天文10(1541)	旧巻斗:1箇	天文四年四月日の墨書がある	1 A
1-19	M40(1907)/8/28	S37(1962)/6/21	山梨県	重文	長谷寺本堂	大永4(1524)	旧材:1枚	大永四口四口林建六日の記がある	1 A
1-20	M41(1908)/8/1 S28(1953)/6/9	S42(1967)/6/15	奈良県	国宝	東照宮本殿、石の間及び拝殿	寛永13(1636)	旧妻戸(本殿):2枚	-	1 A
1-21	M30(1897)/12/28 S27(1952)/3/29	S42(1967)/6/15	奈良県	国宝	興福寺北円堂	承元4(1210)	旧内陣小壁:8組	-	3 B
1-22	M40(1907)/5/27	S42(1967)/12/11	兵庫県	重文	鶴林寺鐘樓	応永14(1407)	旧小屋材:1箇	修理元禄十一戌寅年三月八日の記がある	2 A
1-23	M40(1907)/5/27	S42(1967)/12/11	香川県	重文	明王寺釈迦堂	天文2(1533)	丸瓦及び平瓦:23枚	大永八年の墨書のあるもの18、その他の墨書があるもの4	1 B
1-24	M40(1907)/8/28	S42(1967)/12/11	奈良県	重文	海蔵王寺経藏	正応元(1288)	旧向拝手縁:2箇	-	3 B
1-25	S13(1938)/7/4 S28(1953)/11/14	S46(1971)/3/11	岡山県	国宝	旧閑谷学校講堂	元禄14(1701)	壁書:1枚、丸瓦:1枚	壁書:延寶二年四月朔日の記がある、丸瓦:元禄十三庚辰八月吉祥日作閑谷御學校講堂瓦の刻銘がある	1 B
1-26	M30(1897)/12/28 S28(1953)/6/9	S46(1971)/6/22	奈良県	国宝	唐招提寺金堂	奈良(710-793)	旧部材:22枚	旧内陣天井支輪板4、旧内陣天井板6、旧軒支輪板12	3 B
1-27	M30(1897)/12/28 S28(1953)/6/9	S47(1972)/9/15	京都府	国宝	平等院鳳凰堂中堂	天壽元(1053)	旧板扉:8枚、旧鳳凰棟飾:1対	旧板扉:上品中生、上品下生、中品上生、下品上生各2枚	3 B
1-28	S28(1953)/9/17	S48(1973)/11/29	静岡県	重文	油山寺山門	寛治2(1659)	錠:2個	-	3 B
1-29	M41(1908)/8/1 S28(1953)/6/9	S52(1977)/6/27	栃木県	国宝	東照宮陽明門	寛文13(1636)	旧天井板:2枚	-	3 B
1-30	M37(1904)/2/18 S27(1952)/3/29	S52(1977)/6/27	鳥取県	国宝	三仏寺奥院(投入堂)	平安後期(1086-1184)	古材:43点	柱1、舟肘木1、桁1、垂木21、筋違1、地長押1、平長押1、隠込板1、縁板1、又台台1(梁染堂)、破風板6(うち1は梁染堂)、妻幕板1、格子板3、格子横子3	3 B
1-31	M30(1897)/12/28 S28(1953)/6/9	S53(1978)/5/31	岩手県	国宝	中尊寺金色堂	天治元(1124)	旧組高欄:6組、古材:6点、旧飾金具:2点	古材:入側柱2、側柱1、隅柱2、木瓦1、旧飾金具:八双金具1、薬座金具1	3 B
1-32	M40(1907)/8/28	S55(1980)/5/31	奈良県	重文	瑞花院本堂	嘉吉3(1443)	古瓦:43枚	永享十三年の墨書があるもの1、嘉吉元年の墨書があるもの26、その他他墨書があるもの16	1 B
1-33	T5(1916)/5/24	S55(1980)/5/31	奈良県	重文	御霊神社本殿	文明4(1472)	旧天井板:3枚	原寸引図がある	3 B
1-34	T11(1922)/4/13	S55(1980)/5/31	奈良県	重文	圓福寺本堂	応安4(1371)	旧来迎壁額縁:1本、旧床板:1枚、旧野地板断片:1枚、旧瓦瓦:2箇、旧丸瓦:2枚	旧来迎壁額縁:應安二二年ウヅウ三月廿五日の記がある、旧床板:寛永十九年の記がある、旧野地板断片:安政七六月廿二日終の記がある、旧瓦瓦:享保二十年卯月吉日の記があるもの2、旧丸瓦:享保二十年卯月吉日の記があるもの2	1 B
1-35	T14(1925)/4/24	S55(1980)/5/31	奈良県	重文	不動院本堂	文明15(1483)	旧裏甲:2枚	旧裏甲:延徳三年六月三日の記があるもの1、延徳四年壬子三月日の記があるもの1	2 B
1-36	M44(1911)/4/17	S55(1980)/12/18	奈良県	重文	室生寺御影堂	室町前期(1333-1392)	旧屋根板:7枚、旧裏甲:1枚、旧須弥壇床板:1枚、旧壁板:1枚	旧屋根板:天文廿年の記があるもの5、その他の記があるもの2、旧裏甲:文禄の記がある、旧須弥壇床板:寶永三年いぬノ菊月十六日の記がある、旧壁板:天保四年戊辰三月廿四日の記がある	2 B
1-37	S34(1959)/6/27	S55(1980)/12/18	奈良県	重文	南法華寺礼堂	明応6年(1497)	旧野地板:2枚、旧出桁短木:1箇、旧瓦瓦:2箇	旧野地板:各貞享元年の記があるもの、旧出桁短木:貞享の記があるもの、旧瓦瓦:安永乙未六月日の墨書があるもの1、人名の墨書があるもの1	2 B
1-38	T12(1923)/3/28	S56(1981)/6/5	滋賀県	重文	八幡社本殿	文禄5(1596)	旧高欄壁宝珠:4箇、旧瓦瓦:1組、旧棟脚瓦:2枚	旧高欄壁宝珠:鉄製、文禄五丙寅年八月十五日の刻銘があるもの2、銅製、天保二年辛卯四月吉日の刻銘があるもの2、旧瓦瓦:足元に寛政六丙寅月日の墨書がある、旧棟脚瓦:天明元歳正月月日の墨書があるもの1、人名の墨書があるもの1	1 B
1-39	S24(1949)/2/18	S56(1981)/6/5	滋賀県	重文	志那神社本殿	永仁2(1298)	旧棟木の部分:1箇、古材:5点	旧棟木の部分:永仁六戊戌年七月五日棟上日也の記がある、古材:破風板2、懸魚3	1 B
1-40	M37(1904)/2/18	S56(1981)/6/5	滋賀県	重文	菟村神社棟門	大永2(1522)	古材:2点	親柱断片:宝暦三より年の記がある1、通肘木の部分:宝暦5の記がある1	2 B
1-41	M35(1902)/4/17	S56(1981)/6/5	奈良県	重文	般若寺三重塔	建長5(1253)	旧石蓮花欄:1基、旧銅製欄干:1基	旧銅製欄干:寛政三壬辰秋修治の刻銘がある	2 B
1-42	M37(1904)/2/18	S56(1981)/6/5	奈良県	重文	不退寺南門	正和(1317)	旧壁板:1箇	-	3 A
1-43	M41(1908)/4/23	S56(1981)/6/5	奈良県	重文	不退寺塔婆	鎌倉後期(1275-1332)	古材:7点	尾巻木6、心柱の部分1	3 B
1-44	S22(1947)/2/26	S56(1981)/6/5	奈良県	重文	福智院本堂	建仁3(1203)	旧軒平瓦:1枚	旧軒平瓦:元文五年五月申五日吉日の墨書がある	2 A
1-45	T2(1913)/4/14	S57(1982)/2/16	滋賀県	重文	膳部神社本殿	明応6(1497)	旧軒平瓦:1箇	天明八年三月申三日吉日の記がある	2 A
1-46	T14(1925)/4/24	S57(1982)/2/16	滋賀県	重文	飯道神社本殿	慶安4(1649)	古材:3点	地垂木:造寄慶安二年五月廿日の記があるもの1、慶安二年卯月廿八日の記があるもの1、天保板表:延享二年丑九月の記があるもの1	1 B
1-47	M35(1902)/7/31	S58(1983)/1/7	滋賀県	重文	圓満院家殿	元和5(1619)	獅子口:2箇	天明三亥卯年九月吉日の刻銘があるもの1、天保三三年の刻銘があるもの1	2 B
1-48	T13(1924)/4/15	S58(1983)/1/7	滋賀県	重文	膳所神社表門	明暦元(1655)	旧吸付棧:2本	承応四年十一月吉日の記があるもの1、明暦元年十二月廿五日の記があるもの1	1 B
1-49	S28(1953)/3/31	S58(1983)/1/7	滋賀県	重文	圓光寺本堂	康元2(1257)	丸瓦:2箇	宝永元年申ノ十月月吉日の刻銘があるもの1	2 B
1-50	M42(1909)/4/5	S59(1984)/5/21	京都府	重文	大徳寺法堂	寛永13(1636)	旧裏板:2枚、旧土居裏板:3枚	旧裏板:享保十九甲寅年九月十四日改古の記があるもの1、廊下通造寛延四年辛未林健吉の記があるもの1、旧土居裏板:各元禄十五年午年の記がある	2 B
1-51	M42(1909)/4/5	S59(1984)/5/21	京都府	重文	大徳寺山門	天正17(1589) (上層)、大永5 (1525)(下層)	旧土居裏板:4枚、鬼瓦:3箇	旧土居裏板:山門座落修補元禄十五年午年四月の記があるもの3、山門修補寛文十四月上旬の記があるもの1、鬼瓦:庚子安永九年七月吉日の記があるもの1、庚子安永九年七月廿四日の記があるもの1、天保十四年卯九月吉日の記があるもの1	2 B
1-52	S46(1971)/12/28	S60(1985)/5/18	岐阜県	重文	桑原家住宅(岐阜県養老郡上石津町)主屋	享保19(1734)	旧天井平縁:2本	各寛政十二年の記がある	2 B
1-53	S46(1971)/12/28	S60(1985)/5/18	岐阜県	重文	桑原家住宅(岐阜県養老郡上石津町)北倉	享保2(1742)	旧鬼瓦:1箇	享保五年子十一月九日出來の墨書がある	2 A
1-54	M32(1899)/4/5	S60(1985)/5/18	京都府	重文	南禅寺三門	寛永5(1628)	古瓦:7枚	寛永元年の墨書があるもの8、その他の墨書があるもの1	1 B
1-55	T12(1923)/3/28	S61(1986)/12/20	京都府	重文	十八神社本殿	長享元(1487)	旧軒平瓦:1枚	家根惣其母天保七年の記がある	2 A
1-56	T11(1922)/4/13	S61(1986)/5/24	京都府	重文	天球院本堂	寛永(1624-1643)	旧階下地板:1組 旧獅子口:1箇	旧階下地板:天明四年甲辰十月三引張直の記がある、旧獅子口:享保四年辛亥九月直引直の記がある	2 B
1-57	S42(1967)/6/15	S61(1986)/5/24	京都府	重文	善衡院本堂	慶長9(1604)	旧壁下地板:1枚、旧縁板:1本、古材:25点	旧壁下地板:安永十五年四月六日の記がある、旧縁板:天保五年八月二日の記がある、古材:柱20、軒桁1、隅木2、茅葺2	2 B
1-58	S48(1973)/6/2	S61(1986)/12/20	奈良県	重文	大峰山寺本堂	元禄4(1691)(内陣)、宝永3(1706)(外陣)	旧銅丸瓦:26枚、旧銅丸瓦:10枚	旧銅丸瓦:正徳二年の刻銘があるもの1、享保二十年の刻銘があるもの1、寛保二年の刻銘があるもの1、延享五年の刻銘があるもの23、旧銅丸瓦:正徳二年の刻銘があるもの1、正徳二年の刻銘があるもの2、元文元年の刻銘があるもの5、寛保元年の刻銘があるもの1、寛延三年の刻銘があるもの1	2 B
1-59	S37(1962)/6/21	S62(1987)/6/3	京都府	重文	興臨院本堂	天文・永禄 (1532-1569)	旧横唐戸格戸縁:2組、旧鴨居引付用縁:1本、旧敷居:1本	旧鴨居引付用縁:正徳四年四月十二日の記がある、旧敷居:正徳四年四月十六日の記がある	2 B
1-60	M40(1907)/8/28	S63(1988)/1/13	京都府	重文	雙泉神社本殿	明応3(1494)	旧隔障子欄干:1枚	-	3 A
1-61	S12(1937)/7/29	S63(1988)/1/13	京都府	重文	春日神社本殿	鎌倉前期(1333-1392)	旧向拝頭貫:1組	-	3 A
1-62	T12(1923)/3/28	S63(1988)/1/13	京都府	重文	神皇寺本堂	応永13(1406)	旧瓦瓦:2箇	各文化三年寛九月の墨書がある	2 B
1-63	T2(1913)/4/14	H1(1989)/5/19	京都府	重文	高福寺天王殿	寛文8(1668)	旧土居裏板:1枚	寛文八歳の記がある	1 A
1-64	M32(1899)/4/5	H1(1989)/5/19	京都府	重文	岩船寺三重塔	寛吉2(1442)	旧棟木受飾:1箇	-	3 A
1-65	S52(1977)/1/28	H3(1991)/5/31	新潟県	重文	若林家住宅(新潟県村上市三之町)	明和6(1769)	旧床板:1枚	式台板図	3 A
1-66	M40(1907)/8/28	H10(1988)/12/25	山梨県	重文	窪八幡神社本殿	永正16(1519)	旧壁板(永正十六年):5枚	-	1 B
1-67	M30(1897)/12/28 S28(1953)/6/9	H24(2012)/7/9	奈良県	国宝	唐招提寺金堂	奈良(710-793)	旧隔障:2箇	当初のもの1、元亨三年の記があるもの1	2 B

凡例

①指定年月日に記載するMは明治、Tは大正、Sは昭和、Hは平成を示す。

②建築年代は、『国宝・重要文化財建造物目録 附重要伝統的建造物群保存地区目録』(文化庁、1999年3月)及び文化庁指定文化財等データベース(<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>)を参照した。

③官報にて、墨書等年記の不明文字の周囲を口で囲って示している箇所は、二重線で示し、不明文字を口で示している箇所はそのままだけで示した。

④B型の場合、建築当初またはそれ以前の年記を含む部材がある時は類型1、修理年代の年記がある部材を含む場合は類型2とし、いずれも含む場合は類型1に分類した。

3.3 各類型の件数の推移とその意味

各類型の件数の推移は、昭和 50 年代半ばまでは類型 1 が多く、それ以降は類型 2 と類型 3 の増加の傾向を確認できる。

類型 1 では A 型が昭和 19 年から現れ、昭和 30 年代後半まで増加傾向があるが、その後の変化は見られないのに対し、B 型は昭和 28 年に現れ、昭和 50 年代後半まで緩やかな増加がみられる。

類型 2 では、A 型が昭和 30 年に現れ、B 型は昭和 55 年に遅れて現れる。いずれも増加がみられるのは昭和 50 年代半ば以降である。

類型 3 では、A 型及び B 型はいずれも昭和 27 年に現れるが、A 型の本格的な増加は昭和 50 年代後半にみる。B 型は昭和 40 年代後半から昭和 50 年代後半にかけての増加がみられる。いずれの類型も昭和 50 年代半ばから B 型が増加することが特徴である。

以上の各類型の推移を先の 3 方針と照合し、考察を巡らせたい。

方針①が適用された昭和 19 年から昭和 48 年の時期は、類型 1 が増加する時期である。この類型には、No.1-3 神魂神社本殿の心御柱古材 1 箇や No.1-5 法隆寺南大門の旧棟木 1 本など、軸部、小屋組、組物の部材で建立年代を示す墨書のあるものや、No.1-23 明王寺釈迦堂の丸瓦及び平瓦 23 枚など、建立年代を示す笥書のある瓦などがみられる。これらは解体修理で取り外された部材であるが、墨書等の年記がある点で特徴付けられ、方針①「学術上又は由緒上の価値があると認められるもの」の主な対象になったと考えられる。

方針②が現れる昭和 31 年から昭和 48 年の時期は、類型 3 が現れる時期とほぼ重なる。No.1-20 東照宮本殿、石の間及び拝殿の旧妻戸(本殿)2 枚は当初の蒔絵を残す部材^{注 17)}で、No.1-26 唐招提寺金堂の旧部材 22 枚は当初の彩色を残す部材^{注 18)}である。これらから、墨書等の年記はないが、建立時の貴重な部材が、方針②「仕様の記録としての現物保存」の主な対象になったと考えられる。

方針③が適用された昭和 49 年以降は、類型 2 と類型 3 が急激に増加した時期である。類型 2 のうち、No.1-36 室生寺御影堂の旧屋

根板は、昭和 50 年の現状変更で、屋根を檜皮葺から厚板段葺に復旧した際の根拠資料である^{注 19)}。また、No.1-40 苗村神社楼門の古材 2 点は、昭和 54 年の現状変更で、楼門上層の構造を建立当初の姿に復旧した際、撤去した部材の一部^{注 20)}で、こうした部材が方針③の示す「現状変更の資料としたもの」の対象になったと考えられる。

一方、類型 3 には No.1-30 三仏寺奥院(投入堂)の古材 43 点や No.1-43 不退寺塔婆の古材 7 点など、名称を「古材」そのものとし、古材群の附指定が開始されるのが特徴である。また、No.1-57 衡梅院本堂の古材 25 点のように、前身建物から転用された部材を含んでいるものもあり^{注 21)}、これらが方針③の示す「その他将来重要な参考資料となるとと思われるもの等」の主な対象になったと考えられる。

なお、昭和 49 年以降では類型 1 の微増も確認できる。このことから、方針③が方針①と方針②を包含した考え方であるという先の推定も裏付けられた。また、昭和 49 年の方針③への移行は、A 型から B 型への移行時期とほぼ重なることから、附指定古材では方針の段階的な拡充に伴い、古材群型へ移行したことも明らかになった。

以上、附指定古材の各類型を 3 方針と照合した結果、方針①が類型 1、方針②が類型 3、方針③が類型 2 と類型 3 にそれぞれ対応関係にあることを指摘でき、全保存古材からみた方針の実態は依然として不明であるが、附指定古材に基づく方針の実態は鮮明になった。

ここで方針③の現在の運用状況を確認しておきたい。附指定古材がなくなった平成 24 年以降刊行の工事報告書(平成 24 年 1 月から令和 3 年(2021)3 月)に掲載された 330 棟の建造物で保存古材を確認できたものを取り纏めたのが表 2 である

38 棟で保存古材を確認でき^{注 22)}、それらを先の類型で分類すると、類型 1 の B 型が 2 棟、類型 2 の B 型が 4 棟、類型 3 の A 型が 1 棟、類型 3 の B 型が 31 棟となる。修理工事を経た全ての建造物の把握ではないが、把握できたものは、類型 2 と 3 が多数派を占めることから、保存古材に基づく実態においても方針③の継続を確認できた。

Fig.1 Trend of 6 Types of Removed Parts Compared with 3 Selection Criteria

凡例：S=昭和 H=平成 を示す。

図 1 附指定古材の 6 類型の推移と 3 方針

Table 2 Removed Parts Recorded by Conservation Report for Architectural Cultural Properties (Jan. 2012-Mar. 2021)

表 2 修理事務報告書における保存古材（平成 24 年 1 月—令和 3 年 3 月）

番号 (No.)	所在地 (Prefecture)	種別 (Designation Type)	件名 (Name of Designation)	保存古材点数 (Number of Removed Parts)	構成 (Notes)	種類 (Type)	書名 (Title of Conservation Report)	発行所名 (Publishing Office)	発行年月 (Month and Year of Publication)
2-1	福井県	重文	須波阿須波神社本殿	82	木材62点（昭和25年竣工の解体修理時の保存古材）	3 B	重要文化財須波阿須波神社本殿保存修理事務報告書	宗教法人須波阿須波神社	2012.3
2-2	滋賀県	重文	膳部神社本殿	19	軒丸瓦11枚、軒平瓦8枚	3 B	重要文化財膳部神社本殿保存修理事務報告書	滋賀県教育委員会事務局文化財保護課	2012.2
2-3	東京都	重文	寛永寺旧本坊表門（黒門）	189	木材157点、瓦4枚（移築年代混在あり）、金物28点	2 B	重要文化財寛永寺旧本坊表門（黒門）保存修理事務報告書	宗教法人輪王寺	2012.2
2-4	東京都	重文	護国寺月光殿（旧日光院客殿）	623	木材275点、金物117点、釘60点、瓦115点、建具37点、透間19点	3 B	重要文化財護国寺月光殿（旧日光院客殿）保存修理事務報告書	宗教法人護国寺	2014.1
2-5	山梨県	重文	慈眼寺本堂	580	木材580点	3 B	重要文化財慈眼寺本堂・鐘樓門保存修理事務報告書	宗教法人慈眼寺	2014.1
2-6	山梨県	重文	慈眼寺鐘樓門	139	木材139点	3 B	重要文化財慈眼寺本堂・鐘樓門保存修理事務報告書	同上	同上
2-7	滋賀県	重文	宇和宮神社本殿	1	木材1点	3 A	重要文化財宇和宮神社本殿保存修理事務報告書	滋賀県教育委員会事務局文化財保護課	2014.3
2-8	山口県	重文	下関英国領事館本館	23	木材17点、その他6点（項目のみを点数に数える。実際は25に多数となる。）	3 B	重要文化財下関英国領事館本館ほか2棟保存修理事務報告書	下関市	2014.3
2-9	山口県	重文	下関英国領事館附属屋	4	木材4点（項目のみを点数に数える。実際はさらに多数となる。）	3 B	同上	同上	同上
2-10	愛知県	重文	名古屋城西南隅櫓	143	木材79点、平瓦56枚、軒平瓦2枚、丸瓦8枚	3 B	重要文化財名古屋城西南隅櫓保存修理事務報告書	名古屋市	2015.1
2-11	和歌山県	重文	琴ノ浦温山荘浜敷敷	217	平瓦80枚、丸瓦49枚、瓦斗・唐戸瓦28枚、軒平瓦9枚、軒丸瓦4枚、曳瓦・鳥居瓦5枚、木材37点	2 B	重要文化財琴ノ浦温山荘浜敷敷ほか2棟修理事務報告書	公益財団法人琴ノ浦温山荘	2015.3
2-12	和歌山県	重文	琴ノ浦温山荘延木	31	柱瓦・隅瓦2枚、短み・棟瓦瓦・増設瓦12枚、その他2点、木材14点	3 B	同上	同上	同上
2-13	和歌山県	重文	琴ノ浦温山荘正門	2	その他2点	3 B	同上	同上	同上
2-14	愛媛県	重文	知法寺仏殿	35	木材23点、瓦8点、その他4点（項目のみを点数に数える。実際はさらに多数となる。）尺杖・抽斗間に建立年記墨書あり。	1 B	重要文化財知法寺仏殿保存修理事務報告書（本文編・図版編）	宗教法人知法寺	2015.3
2-15	奈良県	重文	露蔭奥院本堂	73	木材73点	3 B	重要文化財露蔭奥院本堂及び方丈修理事務報告書	奈良県教育委員会	2015.12
2-16	奈良県	重文	露蔭奥院方丈	2	木材2点	3 B	同上	同上	同上
2-17	東京都	重文	武家屋敷門	181	木材11点、金具類170点	3 B	重要文化財武家屋敷門修築工事報告書	学校法人山脇学園	2016.10
2-18	神奈川県	重文	宝城坊本堂	21	木材17点、天井板延年二年墨書あり、化粧墨板延年二年墨書あり1、床板大元元年墨書あり1、隅木補修材昭和27年銘あり1	2 B	重要文化財宝城坊本堂保存修理事務報告書	宗教法人宝城坊	2017.2
2-19	長野県	重文	神明社本殿	5	木材5点	3 B	重要文化財神明社本殿ほか4棟（拝殿、假殿、神楽殿、舞台）保存修理事務報告書	宗教法人神明社	2017.9
2-20	長野県	重文	神明社拝殿	5	木材5点	3 B	同上	同上	同上
2-21	長野県	重文	神明社假殿	12	木材12点	3 B	同上	同上	同上
2-22	長野県	重文	神明社神楽殿	19	木材19点	3 B	同上	同上	同上
2-23	長野県	重文	神明社舞台	5	木材5点	3 B	同上	同上	同上
2-24	京都府	国宝	光明寺二王門	115	木材107点、釘5点、唐板根3点（昭和27年竣工の解体修理時の保存古材）	3 B	国宝光明寺二王門修理事務報告書	京都府教育庁指導部文化財保護課	2019.3
2-25	京都府	国宝	平等院鳳凰堂	260	木材152点、金具108点	3 B	国宝平等院鳳凰堂平成修理事務報告書	宗教法人平等院	2019.3
2-26	奈良県	国宝	法隆寺中門	6	木材6点（明治34年竣工の解体修理時の保存古材）	2 B	国宝法隆寺中門ほか2棟修理事務報告書	奈良県教育委員会	2019.3
2-27	長野県	重文	堀内家住宅	24	木材24点	3 B	重要文化財堀内家住宅ほか1棟保存修理事務報告書	堀内建	2019.3
2-28	大阪府	重文	火走神社摂社奉神社本殿	5	木材5点、縁板・宝間六年の墨書あり1点	3 B	重要文化財火走神社摂社奉神社本殿 保存修理事務報告書	宗教法人火走神社	2019.10
2-29	京都府	重文	知恩院本堂	46	木材20点、金物13点、瓦6点、その他3点、野垂木・貫木・十四年の墨書があるもの3、瓦・年号、記号があるもの1	1 B	国宝・重要文化財知恩院本堂及び集雲堂ほか2棟修理事務報告書（本文・本文編／本文・図版編）	京都府教育庁指導部文化財保護課	2019.11
2-30	奈良県	重文	旧奈良監獄北倉庫	5,594	瓦5,558点、建具4点、木材3点、煉瓦22点、その他7点	3 B	重要文化財旧奈良監獄北倉庫附庫附庫修理事務報告書	旧奈良監獄保存活用株式会社	2020.2
2-31	神奈川県	国宝	宝蔵寺観音堂	1,071	木材3点、彫刻1、068点	3 B	国宝 宝蔵寺唐門ほか3棟観音堂・渡廊（低屋根）・渡廊（高屋根）保存修理事務報告書	滋賀県文化スポーツ部文化財保護課	2020.7
2-32	群馬県	国宝	旧富岡製糸場西置蔵所	276	座敷・軒廻り54点、ヴェランダ軸部材21点、床組・床材164点、建具・造作7点、湿式材2点、煉瓦3点、塗装7点、その他（設備機器等含む）17点、床束：昭和十一年九月のペンキ書あり1	2 B	旧富岡製糸場建造物保存修理事務報告書(2) 国富岡製糸場西置蔵所保存修理事務報告書【建造物編・建造物図編・発掘調査編】	富岡市・富岡市教育委員会	2020.8
2-33	熊本県	重文	阿蘇神社一の神殿	2	木材1点、彫刻1点	3 B	重要文化財阿蘇神社一の神殿ほか5棟 保存修理事務報告書（災害復旧）報告書一の神殿、二の神殿、三の神殿、神守門、退閑門 編）	宗教法人阿蘇神社	2020.10
2-34	熊本県	重文	阿蘇神社二の神殿	2	木材2点	3 B	同上	同上	同上
2-35	熊本県	重文	阿蘇神社三の神殿	5	木材4点、釘1点	3 B	同上	同上	同上
2-36	熊本県	重文	阿蘇神社神守門	3	木材3点	3 B	同上	同上	同上
2-37	熊本県	重文	阿蘇神社退閑門	2	木材2点	3 B	同上	同上	同上
2-38	愛知県	重文	名古屋東山植物園温室前館	111	煉瓦、銅材等多数	3 B	重要文化財名古屋東山植物園温室前館保存修理事務報告書【本文・写真編／図面編】	名古屋市	2021.3

凡例

- ①保存古材点数は、保存古材の項目と数量を掲載して把握できたものに限る。
 ②保存古材点数の単位は、瓦は枚、その他は点とし、その合計を保存古材点数として記載した。なお、1組及び1対、または分類上の項目はあるが員数が不明の場合を1点として数えた。
 ③構成は、工事報告書で分類されている場合はその分類名を記載し、分類がない場合は、便宜上、主要な部材で分類した。
 ④B型の場合、建築当初またはそれ以前の年記を含む部材がある時は類型1、修理年代の年記がある部材を含む場合は類型2とし、いずれも含む場合は類型1に分類した。

一方、方針がない昭和 15 年以前は、附指定古材もないため、これらに基づく実態把握を進めることができない。だが、最初期の解体修理における保存古材の実例や工事報告書から、保存古材の取り扱いの様相が幾らか知られる。

4. 昭和 15 年以前の保存古材の取り扱い

4.1 解体修理における保存古材の保管の開始

明治 30 年に始まる古社寺保存法における最初期の解体修理では、新薬師寺本堂、法起寺三重塔及び唐招提寺金堂の 3 例が知られる。

新薬師寺本堂は明治 31 年竣工の解体修理で、正面の切妻造礼堂、内部では周囲の間仕切、身舎天井等が撤去され、須弥壇の前面が復旧された。破風板 2 枚と大斗 1 個がこの時の保存古材として保管されている^{注 23)}。

法起寺三重塔は、明治 31 年竣工の解体修理で、主に基壇修理の石積の積替、初重の床の及び登り縁の撤去、扉口及び側廻りの地長押の整備等が実施された。切断された心柱の断片（三丁継の下方部）が、この時の保存古材として保管されている^{注 24)}。

唐招提寺金堂は明治 32 年竣工の解体修理で、小屋組をトラス構造に改変、入側柱から内陣大虹梁下の頬杖の撤去等が実施された。旧内陣天井支輪板 4 枚、旧内陣天井板 6 枚、旧軒支輪板 12 枚(No.1-26 参照)がこの時の保存古材として保管されている^{注 25)}。

このように僅か 3 例であるが、最初期の解体修理から保存古材の

保管の開始を確認できる。

4.2 工事報告書にみる保存古材の記録の開始

工事報告書で初めての保存古材は、先述の通り昭和 9 年に解体修理が竣工した正福寺地蔵堂で確認でき、下層の巻斗、飛檐檼、地樑、飛檐隅木、杵肘木、弓格子を各 1 個、上層の杵肘木 2 個、飛檐檼、地樑、茅負切各 1 個、化粧裏板、巻斗各 2 個の合計 15 個を「保存古材目録」として掲載する^{注 26)}。

次の事例は、昭和 10 年に解体修理が竣工した法隆寺食堂及び食堂で、小屋組解体時に土居桁、野垂木、その他小屋組材に転用してあった破風板、茅負、垂木等の古材 28 点が発見された。このうち、垂木 1 本、食堂及び細殿の旧破風板断片 7 個、食堂の旧茅負 2 個、旧木負 1 個、計 11 個が選別され、小屋組で保管される^{注 27)}。

昭和 12 年に解体修理が竣工した興隆寺本堂の工事報告書では、「不再用古材は工事中、一定の場所に整理し、工事俊成後、就中価値あるものは寺院に収納し新補型板其他工事関係品は本堂小屋内に納めた。」とあり^{注 28)}、その保管を示す記載がある。

また、昭和 13 年に解体修理が竣工した石津寺本堂の工事報告書でも、「発見せる古材の内修理再用し得るものは使用し然らざるものは本堂小屋裏内に保存する事とした」とあり^{注 29)}、同じく保管を示す記載を確認できる。

このように昭和 9 年頃から工事報告書への保存古材の記録の開始を確認できる。

4.3 昭和15年以前の保存古材の取り扱いの様相

文化財建造物の保存修理事業への考え方を示す行政資料では、国以外では、京都府の「古社寺建造物修理規定」(明治31年7月7日付京都府令第57号)^{注30)}、滋賀県の「社寺建造物修理及び会計規則」(明治31年2月3日付縣令第十四号)^{注31)}及び「特別保護建造物修理方針」(明治36年8月1日付)^{注32)}が知られる。だが、いずれも保存古材に関する記載は全く見当たらず、これらに基づく保存古材の取り扱いの様相は判明しない。

しかし、保存古材の実例を通して、日本の文化財建造物の保存修理では、不再用部材の中から一部を選別して古材として保管するという取り扱いが、最初期の解体修理から存在することを確認できた。また、昭和9年頃に工事報告書への保存古材の記録を開始したことも判明し、詳細な実態は不明であるが、方針が現れる昭和15年に至るまでの保存古材の取り扱いの様相を把握できた。

5. 結論

以上、本稿では行政資料に現れる保存古材を選別する際の方針に着目して、その存在の有無と変遷を明らかにした上で、附指定古材に基づきその実態を把握した。

方針は、昭和15年に初めて行政資料に示され、方針①「学術上又は由緒上の価値があると認められるもの」となり、その後、昭和31年に方針②「仕様の記録として現物保存」を含みつつ、さらに昭和49年にこれまでの方針を包含して、方針③「現状変更の資料としたもの及びその他将来重要な参考資料となると思われるもの等」として成立したことを確認でき、段階的に拡充した方針の変遷が明らかになった。

また、附指定古材の各類型の推移と3方針を照合した結果、方針①は「建立年代を示す歴史資料」、方針②は「建立や修理の年代を示す墨書等がない建築資料」、方針③は「修理年代を示す歴史資料」と「建立や修理の年代を示す墨書等がない建築資料」にそれぞれ対応関係にあることを確認し、附指定古材に限定されるものの、これまで不鮮明であった方針の実態が明らかになった。さらに附指定古材は方針の段階的な拡充に伴い、昭和50年代半ばには員数構成が単体古材型から古材群型へ移行したことも確認した。

これらの結果に前節で確認した昭和15年以前の様相を加え、各時代における保存古材の取り扱いを整理すると、古社寺保存法時代では保存古材の保管の開始、国宝保存法時代では工事報告書への記録、行政資料での方針の明示及び保存古材の附指定の開始、文化財保護法時代では方針の段階的な拡充とこれに伴い、附指定古材の単体古材型から古材群型への移行として捉えることができた。これらより、日本の文化財建造物における保存古材の取り扱いの変遷を全体的に見通すことが可能になった。

さらに、昭和30年代から40年代にかけての方針の段階的な拡充の時期は、先学が指摘する日本の文化財建造物における保存修理技術が全体に定着する時期^{注33)}とほぼ重なることから、保存古材の取り扱いの変遷に基づき、保存修理技術の定着過程の一端も明らかになった。

ただし、膨大な量に上るとみられる保存古材の全体像やそれに対応する方針の実態は依然として不明で、その解明にはなおも課題を残す^{注34)}。なお、令和元年に耐震対策工事が竣工したNo.2-30旧奈

良監獄北倉庫における5,000点を超える保存古材^{注35)}のように、一棟の古材群の量が突出している事例や、令和2年に保存修理工事等が竣工したNo.2-32旧富岡製糸場西置繭所では、設備機器を含む276点の保存古材を記録し^{注36)}、近代の建造物の保存修理に特有な古材群を保管する事例などもあり、近年の保存古材の取り扱いには、新たな傾向を見出せることも記しておきたい。

注

注1) 関野克『文化財と建築史』(鹿島出版会(SD選書151), 1969.11)、伊藤延男ほか『新建築学体系50 歴史的建造物の保存』(彰国社, 1999.4)などで、保存古材の重要性に触れている。また、1999年イコモス木の委員会で採択された「歴史的木造建造物保存のための原則」(前掲『新建築学体系50 歴史的建造物の保存』掲載の最終草案)第8条では、「取り外した部材その他の歴史的建造物の構成要素は、目録作成し、特徴的な標本は資料の一部として恒久的な収蔵室に保持するべきである」とされる。2017年改訂「木造建築遺産保存のための原則」(<http://iiwc.icomos.org/assets/iiwc-2017-principles-en2.pdf> 参照)の第27条にも、保存古材に関する考え方は全く改訂なく引き継がれ、国際的にもその重要性が認識されている。

注2) 近年の保存古材に対する科学的調査研究の進展は、国立歴史博物館坂本稔・中尾七重編『歴博フォーラム 築何年?炭素で調べる古建築の年代研究』(吉川弘文館, 2015.3)、坂本稔・横山操『樹木・木材と年代研究』(朝倉書店, 2021.3)に詳しく、保存古材を使用した年輪年代法や炭素14年代法による年代研究が進められている。また保存古材を使用した樹種や植生の調査研究として田鶴寿弥子「研究ノート建造物保存修理工事における部材の樹種調査の現状」(『建築史学第七十二号』, 建築史学会, 2019.3)がある。

注3) 昭和26~28年(1951~1953)に解体修理を実施した吉村家住宅で、工事報告書に記載のない保存古材を発見し、重要文化財民家では最古の保存古材である可能性を指摘した大野敏ほか「民家保存形態の類型および修復における成果と課題」『木造建造物の保存修復のあり方と手法』(独立行政法人奈良文化財研究所, pp.151~232, 2003.3)があるが、保存古材の変遷を考察したものではない。また、鳴海祥博「現在行われている指定文化財の修復の方針」(前掲『木造建造物の保存修復のあり方と手法』, pp.69~76)は、行政資料から国の保存修理に対する指導方針の変遷を検討したものとして注目されるが、保存古材の取り扱いだけに着目したものではない。

注4) 重要文化財民家に所蔵する保存古材を報告した『重要文化財民家保存修復資料木造建造物の保存修復のあり方と手法に関する調査研究参考資料』(独立行政法人奈良文化財研究所, 2003.3)がある。また法隆寺所蔵の保存古材の調査内容を概報した海野聡「法隆寺所蔵古材調査1」『奈良文化財研究所研究紀要2010』(独立行政法人奈良文化財研究所, pp.34~35, 2010.6)、大林潤「法隆寺所蔵古材調査4—昭和の大修理と古材の整理—」『奈良文化財研究所研究紀要2014』(独立行政法人奈良文化財研究所, pp.12~13, 2014.7)や国立歴史民俗博物館所蔵の法隆寺の建造物の保存古材を報告した坂本稔他「建造物古材による木材科学的資料研究」(前掲注2)『樹木・木材と年代研究』, pp.105~142)及び唐招提寺の建造物の保存古材を報告した『唐招提寺部材調査報告書』(唐招提寺, 2018.3)がある。だが、いずれも個別建造物の調査で、保存古材の全体像を論じたものではない。

注5) 『文化財建造物保存修理補助事業 実務の手引き』(文化庁, 平成15年(2003)年8月初版, 平成17年(2005)3月改訂, 平成27年(2015)6月改訂, 平成30年(2018)6月最終改訂)。

注6) 前掲注5)『文化財建造物保存修理補助事業 実務の手引き』(最終改訂版)の第一部第3章第2節の「8-1 竣工時の事務」「(6) 資料保存材・残材等の処置」(p.29)参照。なお、方針部分に対する改訂は初版から最終改訂版まで見当たらない。

注7) 文化財建造物における附指定とは、建造物と一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件で、附属的な建造物及び建立、修理の年代を示す歴史資料等が指定されている。

注8) 文部省「国宝建造物維持修理要項」(昭和15年(1935)3月7日文部次官決定)(『国宝保存総規・重要美術品等保存総規』国立公文書館所蔵, 3a-032-07・昭和59文部02534100)。

注9) 関野克資料【資料番号D-626】東京文化財研究所所蔵、『文化財修理関係資料』(文化財保護委員会, 1956.10)所収

注10) 「第二 維持修理ノ方針」の(五)参照。

注11) 「3 建物の解体調査」「建物の仕様調査作製」(pp.2~3)参照。

注12) 「II. 工事事務の心得」「6. 事業完了に伴う事務」「(10) 残材・不用材等

- の処理」(p. 61)参照。
- 注 13)『禅宗様建築 正福寺地藏堂昭和修理記録』(普請研究第 29 号, 普請研究会, 1989. 9) 所収の『國寶正福寺地藏堂修理工事竣成報告書(實施仕様書及び精算書ヲ含ム)』(文化庁所蔵, 1934. 3) による。
- 注 14)『二荒山神社本殿・拝殿修理工事報告書』(二荒山神社, 1967. 1)
- 注 15)平成 24 年(2012))5 月 18 日付け文化庁報道発表資料(文化庁 HP)
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/yukei_kenzobutsu/pdf/yukei_kenzobutsu_240518.pdf 参照。
- 注 16) 例えば、唐招提寺金堂の旧部材 22 枚(表 1 の No. 1-26 参照)に対し、
「(前略)国宝の付(ママ)指定として、唐招提寺金堂の旧部材(支輪板、天井板)同寺講堂の高座一対が追加指定され、従来建造物として比較的縁の薄かった分野に保護の手が及んだ点は注目される。」「月刊文化財 92 号」(第一法規出版株式会社, p. 21, 1971. 5)とある。この他にも幾つかあるが、全ての附指定に対して示されていない。
- 注 17)『国宝東照宮本殿拝殿付属蒔絵屏修理工事報告書』(日光二社一寺文化財保存委員会, 1965. 3)
- 注 18)『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』(奈良県教育委員会, 2009. 12)
- 注 19)『重要文化財室生寺御影堂修理工事報告書』(奈良県教育委員会, 1976. 12)
- 注 20)『重要文化財苗村神社楼門他三棟修理工事報告書』(滋賀県教育委員会, 1981. 9)
- 注 21)『重要文化財衡梅院本堂修理工事報告書』(京都府教育委員会, 1978. 3)
- 注 22)保存古材の目録や項目等で員数を確認できる工事報告書を対象とした。
- 注 23)『国宝新薬師寺本堂 重要文化財地藏堂 重要文化財南門 重要文化財鐘楼工事報告書』(奈良県教育委員会, 1996. 3)
- 注 24)『国宝法起寺三重塔修理工事報告書』(奈良県教育委員会, 1975. 1)
- 注 25)前掲注 18)『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』
- 注 26)前掲注 13)『國寶正福寺地藏堂修理工事竣成報告書(實施仕様書及び精算書ヲ含ム)』
- 注 27)『法隆寺國寶保存工事報告書第二冊 國寶建造物食堂及び細殿修理工事報告』(法隆寺國寶保存事業部, pp. 187-188, 1936. 3)
- 注 28)『國寶興隆寺本堂修理工事報告』(國寶興隆寺本堂修理事務所, p. 4, 1938. 4)
- 注 29)『國寶石津寺本堂修理工事報告書』(滋賀縣國寶石津寺建造物修理出張所, p. 7, 1938. 5)
- 注 30)京都府立京都学・歴彩館所蔵
- 注 31)【昭-す-339(編次 19)】, 滋賀県立公文書館所蔵
- 注 32)【明-せ-75-3(編次 66)】, 滋賀県立公文書館所蔵
- 注 33)「巻頭鼎談 文化財における修理の考え方と技術」『建築雑誌』(日本建築学会, p. 25, 2001. 5)において、鈴木嘉吉氏は「(前略)文化財保護法(昭 25)の成立と同時に修理事業も一気に拡大された。人も現場も増え、それまで確立した技術が全体に定着していくのが、昭和 40 年代ぐらいまでの時期(後略)」と指摘する。
- 注 34)近年では表 2 の No. 2-1 須波阿須疑神社本殿、No. 2-24 光明寺仁王門及び No. 2-26 法隆寺中門のように、かつての修理工事の際の保存古材を工事報告書に記載するものがあり、各所で保管された保存古材の実態が徐々に明らかになりつつある。
- 注 35)『旧奈良監獄北倉庫耐震対策工事報告書』(旧奈良監獄株式会社, 2020. 2)
- 注 36)『旧富岡製糸場建造物保存修理工事報告書(2) 国宝旧富岡製糸場西置繭所修理工事報告書【建造物編】』(富岡市, 2020. 8)

STUDY ON DEVELOPMENT OF JAPANESE HISTORY FOR PRESERVATION OF REMOVED PARTS FROM ARCHITECTURAL CULTURAL PROPERTIES

Yohei KIYONAGA ^{*1}

^{*1} Senior Specialist for Cultural Property, Agency for Cultural Affairs, M.Des.

The author wishes to explore the development of Japanese history for preservation of removed parts from architectural cultural properties while focusing on the selection criteria for its preservation.

Nowadays, based on one of the conservation principles, the original parts essentially would be reused in the conservation process, even the removed parts that are not available for reusing by the deteriorations, would be preserved as much as possible.

However, practically, it is too difficult to preserve whole things of removed parts including heavy deteriorated ones or amount of similarities like roof tiles by the problem of storing site. And actually, more valuable parts must be selected from the all removed parts by some selection criteria.

It seemed that this practical way has been gradually applied for the conservation process. However, so far there is no historical perspective for preservation of removed parts, especially focusing on the selection criteria in Japan, because of few conservation reports described about removed parts in the conservation project that would not be able to make it analyses. And then, the author take an analyses steps as bellow;

Initially by tracing the development of the selection criteria with the guidelines for the conservation project that have been gradually built up by the central government since the first half of the 20th century.

Secondly by making the list of removed parts designated as national treasures and important cultural properties, and analyzing the separated parts into 6 types based on the characters and numbers, in order to unveil the reality of the selection criteria.

Thirdly by finding the first removed parts or the first report of ones, in order to make sure the situation before 1940 which there is no appearance of selection criteria.

Finally by concluding the development of Japanese history of preservation of removed parts from architectural cultural properties.

(2021 年 7 月 30 日原稿受理, 2021 年 9 月 10 日採用決定)